十文字学園女子大学人間生活学部紀要第11巻　2013年

研究ノート

共通科目「読書入門」の授業研究
～テキスト「星の王子さま」を通して～

Lesson Study on “Introduction to Reading” in the General Subject
～Through the text of “The Little Prince”～

山田　陽子
Youko YAMADA

要　約

これは共通科目「読書入門」の授業研究である。筆者は「星の王子さま」をテキストとし、16名の学生とこの授業に取り組んだ。本科目の目的は１，学科の枠組みを超えた新しい仲間づくりをすること２，本に親しみ、言葉によって表された世界を学生自身が解釈してイメージする力を持つこと３, この授業を通して読書意欲のさらなる向上を図ることにある。本研究では、以上の目的を達成するための授業計画を作成し､授業実践を振り返ることをとおして考察する。

１．はじめに

本学では１年生の共通科目として「読書入門」を後期に開設・開講している。本科目は、新入生が所属学科以外の教員のクラスで、様々な学科の仲間とともに、１冊の本を読み合いながら学習する授業である。学生の主体的な学びを促進するために、前期中に配布される読書入門の開設科目一覧表により各自が学びたい本を選択して希望を出すが、所属学科の教員が担当するクラスを選択することはできない。また各クラス18名程度という人数制限があり、履修登録の後で､必要に応じて機械的な抽選によって所属するクラスが決定する。学生によっては第２・第３希望の本と出会うこともあるが、それもまた新しい分野の本に挑戦する機会になり得る。

授業の大まかな展開としては、教室で出会った仲間や教員とともに一冊の本を読み合い、疑問や感想を交流しあって、受講体験記をまとめるというものである。この授業を進めていく中で最も重要なのは、学生が各自の所属するクラスのテキストの魅力に引き込まれて、読み進めていくことの面白さを実感しながら毎回の授業へ臨むことである。本科目の共通の目的は明記されているが、授業計画および授業展開に関しては各担当者に任されている。

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科
Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：授業研究　読書意欲　読み合い　意見の交流　授業の振り返り

筆者は共通の目的から以下の３つを授業目的とする。

１つ目は学科の枠組みを超えた新しい仲間づくりをすることである。複数の学生が半期をかけて１冊の本を読み合い「その本に描写されている世界」という共通の内容が共感を生み出し、交流し合うことや学び合うことにつながっていくものと考える。

２つ目は本に親しみ、言葉によって表された世界を学生自身が解釈してイメージする力を持つことである。自分の感想や考えを言葉で仲間に向けて発信し、仲間からの発信を好奇心をもって受け止めることで、自ずと自分の殻が破られ、解釈の幅が広がり、イメージする力も自由に動き出すと考える。

３つ目はこの授業を通して読書意欲のさらなる向上を図ることである。読書意欲の向上は言うまでもなく他の科目においてもなされている。とはいえ、他の科目とは違う授業スタイルの本科目は新鮮な学習体験の場である。この授業ならではの授業展開で学生の読書意欲の向上を図る。

本研究では、以上の目的を達成するための授業計画を作成し、授業実践を振り返ることをとおして考察する。

２．研究方法

（１）授業の教科書：サン＝テグジュペリ著稲垣直樹訳「星の王子様」平凡社2006年

（２）研究対象者：筆者の担当クラスの学生16名。学科別の人数は児童教育学科５名・食物栄養学科５名・人間発達心理学１名・生活情報学科１名・メディアコミュニケーション学科４名。

（３）研究期間：2012年９月～2013年１月の15回の授業

（４）授業環境の設定：以下のように授業環境を整える。

1)　全員の顔が見渡せるように机を配置する

長机を横３台縦２台で計６台を合わせてその周りに学生16名と筆者が座る。１回目の授業の初めに全員で机と椅子を配置し、２回目以降は授業前に学生のみで配置し、好きな席に座る。

2)　顔と名前が一致するように各自の前にネームプレートを置く

１回目の授業でネームプレートを作成し、活用する。

（５）記述シートの活用

記述シートを「①授業中に直接記述するシート」と「②授業の振り返り用（出席カードを兼ねる）シート」の２種類用意する。①は毎回配布する。各回で読み進める予定の２～３章分について、章毎に「（１）小見出し」「（２）次の章を読むために心にとどめておきたい内容」「（３）この章の感想」の項目をＡ４サイズ１枚（縦）に印刷する。学生はこれに記述し、各自で保管する。②はＢ４サイズ（縦）を15回分に分割したもので、毎回授業の最後に振り返りを記述して提出し、筆者が読み、次の授業の初めに各自に返す（表１）。

表１．2012年度読書入門「星の王子さま」出席カード

	月日	振り返り
1		

（６）授業内容と展開

以下の表２に15回分の指導計画と内容は以下のとおりである（表２）

表２．授業計画と内容

回	授業内容
1回目	○授業概要の説明を聞く ○交流の一環としてネームプレートを作成して提示し、自己紹介及び本科目での各自の目標を発表する ○星の王子さまの全身像の塗り絵（B５）をして主人公のイメージ作りをする ○本文の導入として、以下の文献の「はじめに」（p５～17）を通読し理解する 文献名：稲垣直樹著「『星の王子さま』物語」平凡社新書2011年 ※毎回、次回の授業で取り上げる章を予告し、読んでくることを課題とする ○その日の授業の振り返りを出席カードに記述する
2回目から14回	○Ⅰ章からＸＸⅦ章までを13回に分けて読み解く（１回につき２章程度） ○章毎に以下の①～④の順に授業を展開する ①黙読（７分程度） ②声を出して読み合う（８分程度） ③記述シートに記述する（10分程度） ④記述したものに関して互いに発表し合う（13分程度） ○その日の授業の振り返りを出席カードに記述する（８分程度） ※11回目に学期末のレポート提出について説明を行う
15回目	○授業全体の振り返りを行う ①27章からまとめたい章を選択して、再度まとめる ②３人グループで、この本の一番印象に残っている所や疑問点など自由に語り合う ○その日の授業の振り返りを出席カードに記述する

表２に示した授業内容を次のように展開する。

1） 黙読

沈黙の中で自分の世界が守られた中で読むことによって、自分なりに自由に物語を解釈してイメージする環境を作る。

2） 声を出して読む

参加者全員が読み手の声に導かれながら「星の王子さま」（以下「本」と記す）に描写されている世界に入る時間にする。読み進め方は「１人ずつ順番に読み継いでいく」「主な対話の場面では学生が二つに分かれて台詞を読み、それ以外を筆者が読む」「全員で一緒に読む」である。基本は１人ずつ座席順に読み継ぎ、ほぼ１ページずつ担当する。ＸⅦ章の王子さまとヘビとの対話や王子さまとキツネとの会話は学生が二つに分かれて台詞の部分を読み、筆者がそれ以外の箇所を読む。最終章のＸＸⅥ章・ＸＸⅦ章は全員で最初から最後まで声を合わせて読む。

3） 記述シートに記述する

各自が（１）小見出し（２）次の章を読むために心にとどめておきたい内容（３）この章の感想について思慮した内容を、自分の言葉で記述する。

①小見出し

「星の王子さま」は27章から成り、章の初めにローマ数字が入っている。そこで毎回、その章の物語を自分の中で思い描いた上で、内容を凝縮した小見出しを各自でつける。

②次の章を読み継いでいく時に心に留めておきたいこと

今読み解いている章の中身を文章にすることで内容を整理して把握し、それ以前に読み解いて自分の中に蓄積している物語の中身とつなげる。さらにこの後にくる章に出会う心の準備をする。

③この章の感想

その章の内容から自分の中に湧き上がる感想を率直に言葉で表現し記述することによって、深く物語を味わうよう促す。この体験で味わう満足感が次章を読み解く期待をもたらし、読書意欲を高めることにつながるようにする。

4) 記述したものに関して互いに発表し合う

仲間の中で自分の言葉で発表し、関心をもって聞いてもらうことで、自分の発言の内容と正面から向き合い、自分自身の感性とも向き合うことで、自分の感じ方や考え方を自分の個性として受け入れて、より豊かなものにしていこうとする意欲と結びつける。また、仲間の発言に対して関心をもって聞くことは、仲間一人一人の人となりを理解し尊重することにつながっていることを学ぶ格好の機会にする。その過程で、自分と似ている意見に共感し、異なる意見にどこからそういう発想が生まれるのか好奇心を働かせて理解しようとする。このように授業内だけの仲間関係であっても、積極的に関心を持ち続けることになり、交流が生まれ、関係が育つ。

具体的には学生の様子を観察しながら発表の仕方を変化させる。①に関しては教員から順番に全員が発表する。②③に関しては５回目位までは教員が最初に発言し、後は言いたい人が手を挙げて発言するようにして、無理に発言しなくてよしとする。誰も発言しない沈黙の時間も大事な時間であることを学生に伝えておく。偶然に、２人の学生が同時に発言し始めることが起きるなど、学生の中に発言する意欲の高まりが見られるようになる頃から、少なくとも②③のどちらかについて発言するようにしようと提案する。その後、他の学生の意見がとても参考になり楽しみであるという記述やあまり緊張しないで発言することができるようになってきたという感想が聞かれるようになる頃には、②③とも全員が発言するように提案する。

３．結果と考察

（１）学生が作成した記述シートのまとめ

1) 学生が作成した記述シートのまとめ

毎回の授業で作成した①小見出し②次の文章を読み継いで行くときに心に残しておきた

いこと③この章で読んだ感想の記述シートを表３にまとめた。受講生16名全員がそれぞれ１章分ないし２章分を担当している。

表３．学生が作成した記述シートのまとめ

①小見出し	②次の文章を読み継いでいく時に心に残しておきたいこと

<table>
<tr><td colspan="2">③この章を読んだ感想</td></tr>
<tr><td>A子
Ⅰ章　ぼくが描いたボアの絵</td><td>ぼくはゾウをお腹の中に呑み込んだ“大蛇ボア”の絵を描いたが大人には分かってもらうことができなかった。大人にいろいろ言われ自信をなくした後に、ぼくは飛行機の操縦を覚えた。大人はいつだって説明してやらなければ分からない。</td></tr>
<tr><td colspan="2">大蛇ボアの絵を描いて大人に見せてもみんなが口を揃えて「帽子だね」ということがとてもぼくにとってはさみしかったのではないかなと思いました。ぼくが大人に出会うたびに最初に描いた絵を見せるのは本当に物事を分かる力があるかどうか知ろうとしているのと、ぼくは他の人と分かりあいたのかなと思い、きっと分かり合える人と出会えたら原始林のことも星達のこともたくさん話したいのかなと思いました。</td></tr>
<tr><td>B子
Ⅱ章　ヒツジの絵</td><td>ぼくはずっと独りぼっちでサハラ砂漠に不時着したこと。風変わりな男の子の登場。男の子は大蛇ボアの絵が分かった。男の子はヒツジの絵を描いて欲しいと言う。箱の中にいるヒツジの絵に満足。男の子の家はとても狭い。</td></tr>
<tr><td colspan="2">ぼくは人間関係的に孤独なのだと思った。絶望の環境で出会った男の子と今後どのような関係になるのか楽しみだと思った。</td></tr>
<tr><td>C子
Ⅲ章　空から落ちてきたふたり</td><td>王子さまは「地球以外の星」から来てぼくは不時着したことから２人には“空から来た”という共通点がある。王子さまはぼくにたくさん質問をするのにぼくの質問には上の空でいる。けれど自分の星を思い出す時は少しばかりさみしそう。</td></tr>
<tr><td colspan="2">この章の王子さまはワッハッハと見事な大笑いをしたり、じっと夢見るようにヒツジを見たり、少しばかりさみしそうにしたりと様々な表情をしていた。状況に応じてコロコロと表情が変わるところが、まさに子どもという感じがした。王子さまは、少しばかりさみしそうに自分の星のことを「狭いんだ」と言っていたけれど、どうしてそんなにさみしそうにしているのかが気になった。ぼくが心を奪われたように、王子さまが「地球以外の星」から来たかもしれないと知って私もすごくワクワクした。王子さまは自分のことをぜんぜん話してくれないけれど、王子さまの口から出る言葉から少しずつ分かっていくことも謎解きみたいでおもしろいと思った。</td></tr>
<tr><td>D子
Ⅳ章　星の王子さまB612</td><td>二つ目のとても大事なこと。小さな惑星が何百もあり名前の替わりに番号をつける。王子さまの故郷の星は小惑星B612。子ども達は大人達を大目に見なければならない。子どもは人間が生きる上で何が大切か良く分かっている。思い出を語るのにぼくは本当に悲しくなってしまう。親友を持つなんて誰にもできることではない。ぼくの親友の王子さまは説明を全然してくれなかった。</td></tr>
<tr><td colspan="2">王子さまの星が一軒の家と同じくらいの大きさというのに少し驚きました。しかし王子さまにとても似合っていると思いました。トルコ人の天文学者は初め変な服装をしていたから発表を誰も信じなかったけれど「洋服を着なければ死刑にするぞ」というヨーロッパ風の服装を無理強いしたおかげでスマートな燕尾服を着てもう一度発表したらみんなが口々に賛成してくれてよかったです。大人たちに説明するのには具体的な数字が大切だと分かりました。それは大人たちが成長していく中で頭が固くなるのかなと思います。ぼくがおとぎ話と同じような書き出しをしたかったけどそうしなかったのは気軽に読んで欲しくないからというのは素敵だなと思いました。</td></tr>
<tr><td>E子
Ⅴ章　大きくなる前は、最初は小さい</td><td>ぼくは王子さまのことを少しずつだがわかってきた。ぼくは王子さまから恐ろしいバオバブの話を聞く。王子さまにとってヒツジが小さい木を食べることは大事。ぼくには分からない。王子さまはバオバブの木をヒツジに食べさせたい。バオバブの木はとても大きい。「大きなバオバブも初めは小さかったんだよ」と王子さまが言う。王子さまの星にはいい草と悪い草がある。因って良い種と悪い種がある。でもその種は見えない。バオバブの木は早く取り除かないと大きくなりすぎて星が破裂してしまう。王子さまとぼくは危険を知らせるために絵を描く。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2">王子さまが「バオバブといったって、大きくなる前は、最初は小さいんだよね」と言った時、一番初めに読んだ「レオン・ヴェルトに」を思い出した。大人も最初は子どもだった。と言う言葉と重なって気になった。後、「バオバブの悪い種は目には見えない」と言う言葉も「大切なものは目には見えない」というのと重なって気になった。この章の物語は大切なことを伝えるために何か隠されたメッセージがあると思った。バオバブという木がいったい何なのか良く分からないが、悪い種だとか悪い木だからと言ってすぐ抜かれるのは悲しいと思った。</td></tr>
<tr><td>F子
Ⅵ章　王子さまの悲しい暮らし</td><td>王子さまは王子さまの星で悲しい暮らしをしていたこと。王子さまの星は小さいのでいつでも日の入りが見られること。それらのことを４日目の朝で知ることができたこと。</td></tr>
<tr><td colspan="2">王子さまは心が本当に悲しいときに人は誰でも夕日が見たくなるといっているけれど１日に44回も日の入りを見るほどの王子さまの悲しい理由はなんなのだろうと思いました。また、王子さまの星での悲しい暮らしぶりというのもどのようなものだったかが気になりました。そのような悲しい暮らしぶりだったのに未だに自分の星に住むつもりでいる王子さまの姿に、読んでいる私も悲しくなりました。</td></tr>
<tr><td>G子
Ⅶ章　涙の王国</td><td>王子さまに話しかけられている間ぼくは飛行機のエンジンの修理のことで頭がいっぱいであること。ぼくの飲み水がなくなってきている状態であること。ぼくはイライラしてつい王子さまの質問に対して乱暴に応えてしまったこと。王子さまにはこの時のぼくが“大人みたいな口の利き方”をしていると感じたこと。花たちは心が純であること。ヒツジたちはトゲがあったって花を食べること。王子さまは真っ赤になって怒り最後には泣き出してしまったこと。泣き出した王子さまをぼくは抱きかかえ何か言葉をかけてあげたかったけれど何を言ってあげたらいいのか分からず「自分は上手にものが言えない」ということに気づいたこと。</td></tr>
<tr><td colspan="2">「ぼくは何と言ったらよいか、よく分かりませんでした。ぼくは自分がじょうずににものが言えないと思いました」という文章から、うまく伝えられないもどかしさと王子さまへの温かい思いが伝わってきました。王子さまの一輪の花への強さに感動し、“花たちは心が純である”と言った王子さまの心も花と同様に純であると思った。</td></tr>
<tr><td>H子
Ⅷ章　花の愛し方</td><td>どこからともなく飛んできた種の花は、身支度に余念がなく、とてもおしゃれな一輪の花だったこと。花は慎み深い性格ではなく心配性で空威張りをしていたので、王子さまは心を悩ませていた。しかしかぐわしい匂いで包んで明るく照らしてくれた花のことが王子さまは好きになっていた。花のずるい言い方の裏には優しい心がちゃんとあったけれど、あの頃の王子さまは経験が足りなくて、どうやって花を愛してあげたらよいのか分からなかった。</td></tr>
<tr><td colspan="2">この章では花のことをまるで人間のように表現している点がおもしろいなと思いました。王子さまと花が対等の立場であることが伝わってきました。今まさに一番美しく、光り輝く姿で登場するために身支度に余念がない花がとても可愛らしいと思いました。けれどその花はいつもずるい言い方をするので、王子さまが受けとめられなくなってしまった気持ちが分かります。しかしその一方で王子さまがかぐわしい匂いで包んで明るく照らしてくれる花のことが好きだったので、とても複雑で、たくさん悩んだのだと思いました。そう考えると何だか切ない気持ちになりました。相手が何を言ったかではなく何をしてくれたか。それを考えて答えを導き出すのは難しいことです。王子さまが花の愛し方を分からなかったように、私達人間も人や動物、自然、物などさまざまなことについての愛し方が分かっていない、愛し方を忘れてしまっているときがあるように感じました。</td></tr>
<tr><td>A子
Ⅸ章　王子さまの出発</td><td>王子さまは自分が出発する日の朝もきちんと自分の惑星を綺麗にした。もう二度とこの星には戻らないに違いない。花は非難がましい言葉は何一つ口にしなかった。花は最後の最後まで王子さまに自分の気持ちを言わなかった。とてもプライドの高い花だった。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2">王子さまは出発の朝も丁寧に自分の惑星をきちんと片付けていたが、文章の途中に「少しばかり塞いだ気分」とあったので、まだ少しどこかで悩んでいるのかなと思いました。しかし「もう二度とこの星には戻らないに違いありません」というところから王子さまの決意が固いことが分かりました。花は非難がましい言葉は何一つ口にしませんでしたが、王子さまが自分の気持ちに気づいてくれないのがさみしく、花自身もそのことを表に出さなかったことに悔しい気分でいることがとてもよく分かり、切なくなりました。花はきっと王子さまにずっといて欲しかったけれど、王子さまが決めたことだから引き止めず、“ちょっと強い口調”で突き放したのではないかと思いました。</td></tr>
<tr><td>Ｉ子
Ｘ章　一人ぽっちの王様</td><td>王子さまの旅の始まりの星である。王様が大声をあげたのは家来がきて嬉しかったのとその家来とは王子さまの事だと分からせるため。礼儀にはうるさく絶対君主であったが道理に適った王様。王様は自然の流れを調べてそれを命令だと言っている。王子さまを大臣や大使に任命してやるというのは引き止める理由。陛下には道理に適った命令を与えて頂きたいのですという王子さまの言葉。</td></tr>
<tr><td colspan="2">この章は王子さまのたびの始まりの章なのでとても新鮮でした。ここでは小惑星に住む王様の話でしたが全体を通して見てもいつも思うことは「さみしかったんだろうな」ということです。王様が王子さまが来たときに大声を上げたのもうれしかったのと、自分の存在を分かって欲しかったのではないでしょうか。「近う寄れ」という所は自分が王様だといいたくて偉そうにしていたのではないかと思いました。また絶対君主ではあったものの道理に適った命令をするのは国民がいればとても良い国を築けたのではないかと思い、よく勉強されているなと感じました。しかし王子さまは日の入りが見られないと分かったら残念がっていました。王様は命令しているつもりでも実は自然の流れに従っているだけなのだと気づかれてしまったのではないかと思いました。この章で私が一番好きだったのは王子さまの「陛下には道理に適った命令をぼくに与えていただきたかったのです」と言ったところです。遠回しに「あなたの命令は道理に適っていません」と言っているようなものですから王様も何もいえなくて当然だと思えました。ここでは「大人＝変」と思っている王子さまですが、この先にいいことがたくさんあると応援したくなりました。</td></tr>
<tr><td>Ｅ子
ＸＩ章　うぬぼれ屋が住んでいる星</td><td>２番目の星にはうぬぼれ屋が住んでいた。最初の星と同じように住人が一人しかいないというところ。うぬぼれ屋は王子様に気づくと「称賛者」がやってきたぞ！」と叫んだ。うぬぼれ屋にとっては自分以外の人間は皆自分の称賛者だということ。うぬぼれ屋はだれかに称賛してほしいのだが人が１人も通らないために誰も称賛してくれない。王子さまがパチパチと手を打った。うぬぼれ屋は王子様の拍手が嬉しい。だが王子さまはあきれてしまう。何回か相手をしてあげたけれど次の星へ行ってしまう。</td></tr>
<tr><td colspan="2">うぬぼれ屋はだれかに称賛されることで、自分の存在価値を高めていきたかったのではないだろうか。私も褒められたら嬉しいし頑張ろうと思える。１人はやはり寂しいし孤独は本当に辛い。そんな時に王子様が来てくれてうぬぼれ屋にとって本当にうれしかったのではないか。拍手される喜びなど、これまでにない経験ができて王子様がいなくなってしまうのが嫌だったんだと思う。「お願いだから」とうぬぼれ屋が行っているところから嘘でも何でも良いから自分が１番だということを認めてほしいのだと思った。今の環境に満足していないうぬぼれ屋が可哀そうで、少し心が痛んだ。</td></tr>
<tr><td>Ｊ子
ＸⅡ章　忘れ方</td><td>酒飲みの住んでいる星に王子様は短い時間しかいなかったけれど、それでも大層気分が塞いだ。酒飲みは酒を飲んで恥ずかしい思いをしていることを忘れるために酒を飲んでいる。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2">酒飲みがなぜ酒を飲むのか理由を聞かれて正直に答えたのは星で独りぼっちで寂しかったためで、誰かに本当のことを知ってもらいたいと思っていたのではないかと感じました。王子様は酒飲みを救ってやりたいという気持ちから突っ込んだことを聞き、とはいえ酒飲みは一言言って黙ってしまったため、どうしようもできなかったというのは、実際にもおこることだし、暗い顔でいられると自分でも気分が塞ぐなと思いました。他の星の大人たちは独りぼっちでも明るく過ごして誰かが来るのを楽しみにしている人が多かったのにこの星では自分の殻に閉じこもってしまっている姿が印象的でした。酒飲みは独りぼっちを忘れるために酒を飲み、更にその繰り返しなのではないかと思いました。独りぼっちを忘れるために酒を飲むことしかできないことに対して恥ずかしいのかなとも感じました。</td></tr>
<tr><td>K子
ⅩⅢ章　実業家の住む星</td><td>王子様は実業家が前の章の酔っ払いと似た考え方をすると思った。実業家は自分のことを真面目な人間だからと言っており、いつも忙しそうにしている。王子様は実業家にいくつも質問を繰り返している。真っ当ということについて、王子さまと大人たちとは似ても似つかない考えをもっている。王子さまは大人はやはり得体のしれないものだなあと心の中で思った。</td></tr>
<tr><td colspan="2">王子さまと大人たちとでは所有しているものとか大切なものの意味がこんなにも違ってくるんだなと思いました。相手の役に立つという王子さまの考え方はとても素敵でこのことが後々自分の花とか火山に対して責任があるんだと気がつくことにも繋がっているのではないかと思います。私もこんなにも忙しそうにして星の数を数える実業家に対してそんなことをして意味があるのだろうかと疑問に思いました。</td></tr>
<tr><td>F子
ⅩⅣ章　王子さまが好きな点灯夫の星</td><td>５番目の星では1,440回もの日の入りが見られること。王子さまが初めて大人を変だと思わなかった。</td></tr>
<tr><td colspan="2">王子さまはこの５番目の星でやっと大人のことを変だと思わなくなりました。王子さまが変だと思う大人は自分のことばかりな人で、この点灯夫は人のために何もおかしいと思わずに仕事をしているから王子さまは変だと思わなかったのだと思います。今までに出会ってきた大人たちはこの点灯夫のことを逆に変だと思ってしまうのではないでしょうか。点灯夫に休める方法を教えた王子さまは、点灯夫のことが本当に好きなのだと思いました。</td></tr>
<tr><td>L子
ⅩⅤ章　地理学者の住む星</td><td>いろいろな海とか河とか町とか山とか砂漠とかが、どこにあるかを知っている学者イコール地理学者。地理学者そのものは記録するだけで調査報告するのは探検家の役目。永遠に変わらないものやことだけを記録する。花は「はかない」。王子さまは花を独りぼっちにしてしまったことを後悔した。地理学者が王子さまに地球に行くことを勧めた。</td></tr>
<tr><td colspan="2">王子さまがこの星に着くなり、王子さまを見た地理学者が「探検家が来たぞ！」と大声をあげている様子から、探検家が増えて喜んでいることが伝わってきました。また地理学者は記録するだけで、調査するのは探検家の仕事と言うのが面白いと思いました。一方で探検家が足りなくて困っているのならば自分も調査に行けばいいのにと思いました。他には、「はかない」という言葉を知らなかった王子さまがかわいらしくも感じました。私は近いうちに消えてなくなる恐れのあるものこそ、きれいで大切にしなければならないと思いました。王子様は星を離れたことを後悔したのになぜこの時、戻らなかったのだろうと思いました。</td></tr>
<tr><td>G子
ⅩⅥ章　地球にいる点灯夫たち</td><td>地球には46万2,511人の点灯夫がいる。点灯夫達はそれぞれの地域で一糸乱れぬ動きをして働いている。北極と南極の点灯夫は１年に２回だけしか働かない。地球ではうぬぼれ屋の人口が最も多い。</td></tr>
<tr><td colspan="2">最初の地球の情報としてうぬぼれ屋の人口が最も多く描かれていて余り良いイメージではなかったけれど、46万2,511人もの点灯夫達がオペラ座のバレエの動きと同じくらい一糸乱れぬ動きによって働いているとの表現から、何かに対して一生懸命挑む姿勢が描かれており、地球のイメージが明るくなったように感じました。太陽の光を点灯夫がつける光として表現しているところがとても気に入りました。</td></tr>
</table>

M子 ⅩⅦ章　王子さまとヘビの出会い	王子さまはアフリカの砂漠で金色のヘビと出会った。地球で最初に出会ったのは人間ではなくヘビだった。王子さまに向けて「おれが触ると誰だって土に帰ってしまうんだ」というヘビの言葉。
私が想像していたのは人間に出会うということでしたので、最初の出会いがこの謎めいたヘビとの出会いだったので少し驚きました。しかしこの蛇の一言一言にはどこか強い意味があるのではないかと感じました。この謎めいたヘビとの出会いがこれからどのような意味を持ちどのように王子さまと関わって行くのかなと思いました。	
H子 ⅩⅧ章　貧弱この上ない花	砂漠を横断して出会ったのは、たった１輪の花だけで、しかも花びら３枚だけの貧弱この上ない花だった。とても短い章で、王子さまと花との会話は挨拶と人間達はどこにいるかを尋ねただけだった。
とても短い章で内容もそれほど重要であるとは感じませんでした。この貧弱な花と王子さまの星に残してきた美しい花とが対照的に描かれていると思いました。王子さまが自分の花のことを思い出して、とても懐かしんでいるようにも感じ取ることが出来ました。王子さまが貧弱な花に「人間達はどこにいるんですか？」と尋ねましたが結局花の答えからは人間達の居場所は分からずこの会話にはどのような意味があったのかが今でも疑問として残っています。また改めて読み直してみたいと思いました。	
N子 ⅩⅨ章　とがった岩山	王子さまは地球をなんてヘンテコな惑星なのだろうと思った。これまでに王子さまが見たことのある山は王子さまの膝までの高さしかない三つの火山だけだった。王子さまはこんなに高い山の上からだったら人間達が１人残らず一度に見渡すことができるだろうと考えた。「友だちになってよ。僕独りぼっちなんだ」と言うと、こだまが返ってきた。人間達は知恵が回らないと思った。自分の星に咲いている１輪の花は自分から話の口火を切ってくれた。
今まで王子さまは自分の星の三つの火山しか見たことがなかったのでこんなに大きな山を見て驚いただろうし、見るものすべてがはじめてのことだったと思います。王子さまが「独りぼっちなんだ。友だちになってよ」と叫んだり、花のことを思い出したりして、寂しい気持ちがだんだんと大きくなっていたのかなあと感じました。またたくさんの場所を旅していろいろな思いや経験をしてきたのだと思います。	
O子 ⅩⅩ章　たくさん咲き乱れたバラの花	王子さまはバラがたくさん咲き乱れた庭に着く。王子さまの花は王子さまに「この宇宙でバラの花はたった１輪だけよ」と話していた。王子さまは自分がこの世にたった１輪しかない花を宝にしていると思っていたけれど実はどこにでもあるバラを１輪持っていただけだと知って悲しくなった。王子さまは自分が大した王子ではないと分かって泣いた。
王子さまは今まで疑問に思っていたことはたくさんあったけれど自分の信じていたことが崩れてしまったのは初めてだったので、とても繊細な王子さまはきっとものすごく傷ついてショックを受けてしまっただろうと感じました。それでも王子さまが育てていたバラは王子さまが育てたかけがえのない一本だと早く気付いてくれればいいなと思いました。	
P子 ⅩⅩⅠ章　キツネの言葉	なじみになるというのは絆を結ぶということ。自分がなじみになるものしか人は知ることはない。ならわしというのはある１日が他のどんな１日とも違うし、ある時間が他のどんな時間とも違うようにするもの。心で見なければよく見えてこない。大切なものは目には見えない。王子さまがバラのために失った時間こそが王子さまのバラをかけがえのないものにしている。自分でなじみになったものに対してずっと責任がある。王子さまはキツネの言葉を何度も言ってしっかり覚えようとした。

キツネの１つひとつの言葉は当たり前のようなことばかりだけれど普段意識することが少なく、忘れてしまっているように思いました。「でたらめな時間にやってきたら何時に心の着替えをしたらいいか見当がつかなくなってしまう」と言ったキツネの「心の着替え」という言葉に何だか惹かれて、自分も心の着替えをしているなあと思いました。また「君が君のバラのために失った時間こそが君のバラをかけがえのないものにしているんだよ」という言葉はこの章の中で一番私の心に残っています。そのもののためにかけた時間、その過程がそのものを自分にとってかけがえのないものにしているのだということに気がついてすごく心に響きました。王子さまもその事に気がついてその言葉をしっかり覚えておきたいと思って、繰り返しつぶやいたのかなと思いました。	
M子 ＸＸⅡ章　転轍手	王子さまからみた特急列車の印象。初めて会った人間は子どもをうらやましがる転轍手だった。子ども達は何を捜しているのか分かっている。大人たちは何も追いかけてはいない。「自分がいるところは誰だって気に入らないものだよ。住めば都の反対さ」（転轍手の言葉。「ぼろ切れでできた人形のためにだって、子ども達は平気で時間を使ってしまう。おかげでその人形はとても大切なものになるんだ。だから人形を取り上げられたりすると子ども達は泣いてしまうんだ」（転轍手の言葉）。
転轍手の言葉から、大人達は日々の生活に慣れすぎてしまったせいで身近にある大切なものを大切だと気づかなくなってしまっているのではないかと思いました。また子ども達についての転轍手の言葉から子ども達は例え周りの大人たちが大切なものでないと評価していても、自分がそのものを大切に思うことで自分にとってはとても重要でかけがえのないものへとなっていくのだなと思いました。子ども達が自分の大切なものに必死になるのだと思いました。だけど転轍手がいいなと言っていたので、大人はそのことを忘れてできないのかなと思いました。	
B子 ＸＸⅢ章　商人	のどが渇かなくなる特効薬の錠剤。この錠剤を飲むことで、１週間で53分の時間の節約になる。王子さまは錠剤を飲むより53分使って泉の方へゆっくりと歩いて行くと考える。
時間の有効活用とは何だろうとこの章の王子さまの言葉から考えさせられました。	
J子 ＸＸⅣ章　美しい理由	井戸を探すという王子さまに対し、ぼくはそんな気分になれないという素振りをした。水は心によいものだよ。満天の星が美しいのは目には見えない花がどこかの星に咲いているから。砂漠が美しいのはどこかに井戸を隠し持っているから。美しいのは目には見えないもののおかげ。
王子さまがキツネについて話している時に飲み水がもうないことで頭が一杯だったぼくは、王子さまの話をどうでもよく思っていたのはぼくが大人と同じ考えになりつつあるように思えました。でも井戸を探していく内に美しいものはどういうものか、また自分が子どもの頃のことを思い出したことで考え方が変わり王子さまの言っていることが分かったのはよかったと思いました。「水は心によいものだよ」というのは今ふたりで井戸を探してみつけようとする時間を大切に思えることで水も心によいという意味だったのだはないかと思いました。また大切なものは目には見えなくてその中に一途に思い続けるものがあるから他の人は心を動かされていくんだと気づかされて、素敵だなと思いました。	
C子 ＸＸＶ章　王子さまとぼくと滑車の歌	人間達は自分が何を探しているか分からなくなってしまっている。だけど人間達が探しているものはたった一輪のバラとかほんの少しの水の中にある、目には見えないもの。だから心で探さなくてはダメなんだ。ぼくの書いたバオバブはキャベツみたいで、キツネは耳が長くて角みたいになっているけれど、子ども達になら分かるもの。明日は王子さまが地球の上に落ちてきてちょうど一年目。そしてぼくと会ったのは偶然ではなかった!!ぼくには王子さまが何を探していたのか分かった。ぼくの汲んだ水はのどの渇きを癒す以上のもので子どもの頃の贈り物みたいにいろんなものが寄り集まって輝いている。ぼくは王子さまのなじみだから心配でたまらない。

<table>
<tr><td colspan="2">前章で出てきた「水は心によいものだ」の意味がやっと分かった気がした。素敵なことが寄り集まってキラキラ輝いているプレゼントのように、滑車の歌があって、ぼくが汲み上げて、そして２人でさんざん歩いてきたからこそ、心によい、のどの渇きを癒す以上のものになったのかなと思うと飲んでみたいと思った。１年目というのは何か特別な意味があるのだろうか。もしかして帰ってしまうのかなと考えるだけでとても悲しくなる。けれどこれは、王子さまとなじみになった証拠なんだ。人間達はいつも必死に動いているけれど大切なことはどこか身近に埋もれているんじゃないかな。それがひとつになってしまった時に、輝いている場所を知らせてくれるものだと思った。</td></tr>
<tr><td>Ｏ子
ＸＸⅥ章　贈り物</td><td>ぼくの飛行機の修理がうまくいったこと。そのことをまだ王子さまに言っていないのに知っていたこと。王子さまは底なしの深みに真っ逆さまに落ちていき、ぼくはどうにも止められない。王子さまの笑い声は砂漠でみつける泉のようなもの・王子さまが泣いていた。王子さまが地球に落ちた１年前が今日。一度も解いたことのない金色のマフラーをぼくが解いた。</td></tr>
<tr><td colspan="2">別れ方が少し分かりにくいと思いました。２人が離れたくない気持ちがすごく伝わってきます。この章だけを読むと王子さまは本当に星に帰ることができたのかと不安になってしまいました。２人の悲しみが伝わってきて私もすごく悲しい気持ちになりました。ぼくが王子さまを抱きしめたりするなど、王子さまに触れる機会が少しずつ増えていると思います。何か言葉だけでは伝わらないことがあるんだと思いました。私が一番印象に残っているのは「ぼくは君から離れないよ」とぼくが何回も言うところです。王子さまがぼくに何を言っても「ぼくは君から離れないよ」と言っていて、ぼくにはそのことしか頭にないんだと思いました。王子さまもぼくと同じくらい思っていることが分かります。ストレートな言葉ではないけれど怖くて座り込んでしまったり泣いてしまったりという王子さまの行動から、ぼくから離れたくない気持ちが伝わってきました。私はヘビについて疑問を持ちました。王子さまは、行きは渡り鳥で来たのに帰りはヘビに噛まれて星に戻る。他の方法はなかったのかと。またヘビに噛まれた後どうなるんだろうと思いました。体は重くて持っていけないと書いてあるので心だけが戻ったのかなと思いました。王子さまはぼくが大切だからこそ自分が死んでしまったような姿は見せたくないのだろう。キツネが教えてくれたように考え方次第でいろんなものがその人との思い出になる。そのことをこの章では思い返しています。王子さまとぼくはそれぞれに５億個の鈴と５億個の泉の贈り物があって、それで２人はつながっている気がしました。普通だったら何でもない景色だけれど二人が見れば違う景色‼２人だけの秘密みたいでとても素敵だと思いました。</td></tr>
<tr><td>Ｏ子
ＸＸⅦ章　大人には分からない大切なこと</td><td>王子さまが星へ帰ってから６年経つが、ぼくの悲しみは対して癒されていないということ。ぼくは夜、星達の声に耳を傾けるのが好きになり、それは５億個の鈴が鳴っているようである。ぼくの気持ちと比例するように夜空の星が表情を変える。</td></tr>
<tr><td colspan="2">改めてぼくにとっての王子さまの存在の大きさを感じました。また王子さまは星へ帰ってしまわれましたがすぐ傍にいなくても夜の星となって、僕にとっては永遠の存在であって欲しいと思いました。</td></tr>
</table>

2）　考察

表２は、授業目的の２つ目に関連する内容である。学生の記述から、全ての章において、言葉によって表された物語の世界を自分なりに解釈し、（２）次回を読み進めるために覚えておきたい内容として記述し、それらを凝縮させて（１）小見出しを付けていることが伺える。（１）（２）をもとに（３）この章を読んだ感想を紡ぎだしている。（３）には、登場人物への共感・自分の率直な感想・驚き・疑問・今後の展開への期待・物語で起こっている事と現実との比較・自分自身の行き方の振り返り・物語の内容から編み出した自分なりのイメージ・次章の展開の予測・登場人物への願いなどが記述されており、自分なりにイメージし、思慮を巡らせて、じっくりとその章の物語を味わっていることが伺える。

（２）授業の感想の分析

1）　７項目の分類

出席カードへの記述はその日の授業の振り返りを目的として毎回授業の最後に約７分間かけて、自由に記述した。16名の学生の出席カードに記入された15回分の授業感想を分析し、７項目に分類することができた。項目名とそれに関連する学生の記述は以下のとおりである。尚、受講者全員の記述を網羅するよう努めた。

①その日の授業で一番印象に残ったこと

＊今日はキツネの登場シーンということですごく楽しみにしていました。そしたらやっぱり内容も濃くて、すごく時間を使いましたね。けれどそれをする価値は充分にあった章でした。キツネの台詞は名言が多くて、私自身も気づかなかったことや忘れていたことを教えてくれて、とても心に刺さりました。謎な部分も多かったけれど、みんなの意見も聞けて、考え直せた所もあってよかったです。このキツネとの出会いで、今後王子さまはどう変わっていくんだろうっていうのが､今後一番の見所かなと思いました。今日も楽しかったです。（９回目）

②声を出して読むことの意義と感想

＊みんなの前で読むのは緊張しました。でも、声を出して読むことで、より本の内容を理解できるのではないかと思い、とても良いことだなと思いました。また声を出すことによって、自分の意見を言いやすくなるのではないかと思いました。（２回目）

＊声に出して読むと眼で読んでいるときよりも「ぼく」や王子さまがどんなことを考えているのかが分かってきて想像がふくらんできて大事だなと思いました。回りの人の考え方も面白くて想像が広がった。今日はほとんど発言ができなかった。聞いているだけになってしまったので、次に自分から発言して参加したいです。（２回目）

③感想や意見の交流

＊前回までのように、発言する時に身構えて緊張することがなくなってきて、みんなの前で声を出して自分の感想を発表することに抵抗がなくなってきました。本の内容もみんなの意見や感想を聞くことで、自分とは違った見方があるんだなと面白く思って、深く理解することができると思いました。（８回目）

④前回までの物語への疑問に対する答え

＊王子さまが地球に落ちてきて１年が経つことがどんな意味をもっているのか前回までは分からなかったけれど、今日の所を読んで、地球の真上に王子さまの星が来るということだと気づいた。(12回目)

⑤次回への期待

＊今まで、何故こんなにも素敵な本を読んでこなかったのかと改めて思いました。続きが気になるし、何より、自分以外の人の意見や考えを速く聞きたいです。だんだん、自分の感想もみんなに言うことが楽しくなってきました。（７回目）

⑥授業全体への感想

＊星の王子さまを読み終えて、私はこの話を忘れずにいたいと思いました。この話は大人には分かってもらえないといわれているけど、大人になっても分かっていたいと思います。話の中では実際に人間の大人でいそうな人たちが出てきたけれど、これは作者が嫌いな大人たち

で、これを読んだ子どもになっては欲しくないという意味も込められているのではないかと思うようになりました。(14回目)

⑦他学科の学生との交流についての感想

＊初めての授業でした。私の学科からは私だけだったのでさびしいです。でもひとりしかいないのをマイナスではなくプラスに思って、他学科の学生と仲良くなれるきっかけにしたいです。私は人前で話すのが苦手で人見知りもするのですが、授業に積極的に取り組んで、早くみんなと仲良くなりたいです。(１回目)

＊星の王子さまを読んで、たくさんのことを学ぶことができたと思います。この授業での発言は、最初は戸惑っていたけれど、最後には普通に発言することができました。また、他学科の人と話すこともあり、良い機会になりました。そして私は本を読むことが久々だったのですが、改めて本のよさを知り、いろいろと読みたくなりました。(15回目)

2)　７項目の分類による分析

それぞれ学生の出席カードに含まれている７項目の内容を数量化し、それぞれが示す割合を表４に示した。

表４．授業の振り返りの内容の分類別による分析

		A子	B子	C子	D子	E子	F子	G子	H子	I子	J子	K子	L子	M子	N子	O子	P子	合計
①	その日の授業で一番印象に残ったこと	9	13	13	12	13	11	8	13	11	11	11	11	8	13	13	10	180
②	声を出して読むことの意義と感想	3	1	3	1	1	1	0	0	1	2	1	2	2	1	2	3	24
③	互いに感想や意見の交流	6	4	1	2	3	3	1	0	2	7	5	1	4	1	1	0	41
④	前回までの物語への疑問に対する答え	2	1	0	1	1	4	1	0	4	2	2	3	1	2	0	0	24
⑤	次回への期待	2	11	2	5	9	4	5	3	4	8	8	5	3	6	5	4	84
⑥	授業全体への感想	5	2	3	4	2	5	4	2	4	10	3	2	4	3	2	2	57
⑦	他学科の学生との交流についての感想	0	0	0	1	1	0	0	0	1	5	3	2	3	1	2	2	21

表４で示すように、16名の回答者のうち、10名が「①その日の授業で一番印象に残った」の回答が一番多く、「⑤次回への期待」の回答が次に多かった。上記の回答者10名を除く６名のうち５名は、「①その日の授業で一番印象に残った」の回答の次に多かった回答が「⑥授業全体への感想」だった。この結果から、その日の授業で多くのことが印象に残っている学生は、次の授業への期待も高いことが伺える。

16名の受講者の15回分の出席カードに含まれている７項目の内容が示す割合を図１に示す。

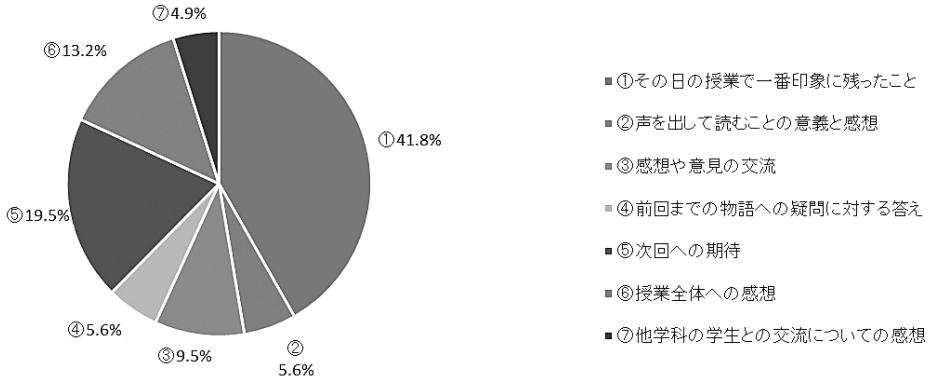

図１．授業の振り返りの内容における項目別の割合（n＝16）

図１で示したように、振り返りの内容で最も割合の高い項目は①その日の授業で一番印象に残ったこと41.8％であり、２番目は⑤次回へ向けての期待19.5％、３番目が⑥授業全体への感想13.2％である。４番目③感想や意見の交流9.5％、５番目が②声を出して読むことの意義と感想および④前回までの物語への疑問に対する答え5.6％であり、７番目が⑦他学科の学生との交流についての感想4.9％という順番だった。

16名の受講者の各項目への回答について一定の傾向を示していることが分かる（表４）。

3） 考察

前述の 2）の分析結果を３つの授業の目的に沿って考察する。

授業の目的１，学科の枠組みを超えた新しい仲間作りをすること他学科の学生との交流についての感想は最初と最後の頃に集中しており、最初の頃は不安と期待感で、最後の頃は交流の手応えを実感したものであった。このことから、各学生が仲間作りをすることへの意識を持ち続けていたことが伺える。この授業での筆者の仲間関係のイメージは「１人で立ってみんなで歩く」というもので、集団の中に在って、自分の解釈やイメージに自信を持ち、ありのままを仲間に伝えることを基盤に据えた。直接意見を交流し合う時間は、唯一15回目のグループ討議だけだった。しかしながら、各自が必ず発言し、仲間の発言を必ず聞くことを繰り返す過程で、自分と重なる内容には共感し、自分と異な内容には好奇心を抱くことによって、各自の中で相手との交流が生まれ、それぞれの仲間に対して積極的に関心を持ち続けることに至ったと考える。さらに、仲間の発言を聞くことが、自分の解釈やイメージを広げていく契機になっていることも学生の記述から感じ取ることができた。３番目に授業全体の感想が上がっている背景には、授業を構成している受講者の一員として自分を位置づけて授業全体へ主体的に臨んでいるという意識を持っていることが伺える。

授業の目的２，本に親しみ、言葉によって表された世界を学生自身が解釈し、イメージする力をもつ

その日の授業で一番印象に残ったことを記述する割合が最も高いことから、思慮を巡らして物語をじっくり味わい、心に刻み込んでいることが伺える。また、読み進めていく中で疑問を持ったときにすぐに答えが得られなくても、その疑問を持ちつつ読み進めていくことで、その後の章に隠されていた答えを見出したり、自分なりにイメージして答えを編み出したりしている姿も見られ、その時の喜びも添えられていることから、いろいろな形で本に親しんでいる姿が伺える。

授業の目的３，本授業を通して読書意欲の更なる向上を図る

次回への期待が２番目に高かったことから、読書意欲をもって授業に臨んでいたことが伺える。また、読書意欲の高さと受講生の志望動機が関連していることが併せて考えられる。受講生16名の内１名がこれまでにこの本を読んだ経験があり、再度読み返したいということだった。他15名は本の名前はよく聞いて知っていたものの読んだことがなかったのでこの機会に読みたいということで、彼らは読み始めてすぐにこの本に魅せられたことが記述されている。

さらに、授業が終わりに近づく頃になって、これからいろいろな本を読んでいきたいと５名の学生が意思表明していることから、この本に導かれて読み進めていくことの面白さと読み終える満足感を、授業をとおして味わっていることが伺える。

結　論

今回、学生が「読書入門」を受講することで、読書するという行為に対する構えが、より定着したと思われる。ここでいう構えとは、本のジャンルは何であれ、出会った本に対して自分の心を開いてその本の世界に入り、積極的に読み解いていこうとする態度である。

さらに読書する過程を支えるのは、自分自身であり、同じ本を読んでいる周りの仲間であり、教員であることに気づくことができたと思われる。

学生が「読書入門」で、自分の読み解きに自信を持ちつつも、自分の殻をその都度破って、仲間同士で互いの読み解きを発信し合い受け止め合い意見を出し合って交流し、教員からのアドバイスを受けながら、本からの恵みをより豊かに享受することを願っている。